様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１９９８６

研究課題名（和文）日本語における付帯状況節の構造変化に関する通時的研究

研究課題名（英文）Diachronic Study on the Structural Changes of Attendant Circumstances Clauses in Japanese

研究代表者
菊池　そのみ（Kikuchi, Sonomi）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：７０９６４８０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語の「～て」や「～つつ」のような動作が行われる際の主体や対象の付帯的な様子を表す節（＝付帯状況節）の構造変化を通時的な調査に基づいて実証的に解明するものである。本研究では付帯状況節の構造変化についてそのプロセスを明らかにすると共に、格に着目して中古語の従属節分類の再検討を試みた。更に用例調査に資するコーパスを大規模な研究機関の手を借りずに構築し、その方法や課題を公表した。また、日本語学において「付帯状況」という術語がどのように用いられてきたかという点を調査したり、付帯状況を表す形式に関する古語辞典の記述を整理したりすることを通して、当該分野の更なる課題を明確にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は従来、個別の形式の共時的な研究に留まっていた付帯状況節について、その歴史的変化を明らかにした点において学術的な意義がある。また、付帯状況節の構造変化を解明することを通して、個別の形式に関する語彙論的な視点と格・修飾・接続に関する文法論的な視点とが共に求められる分析の事例を示したものとしても位置づけられる。
これに加えて、用例調査に資する新たな古典語のコーパスを構築し、その方法や課題を公表したことは当該分野のみに留まらない研究の可能性を示唆したという点で意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study empirically elucidated the structural changes of attendant circumstances clauses through diachronic investigation. It specifically focuses on expressions, such as “-te” and “-tutu” denoting the incidental state of agents and objects during actions. This study also focuses on the structural changes of attendant circumstances clauses to clarify the process and proposes a new classification of subordinate clauses based on the system of case marking; furthermore, it constructs a corpus conducive to the aforementioned investigations without relying on large-scale research institutions. In addition, this study reports its methods and challenges, examines how the term “Futaijyokyo” has been used in Japanese linguistics, and addresses issues regarding attendant circumstances clauses in Japanese education.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史　従属節　付帯状況節

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本語における「～て」、「～つつ」、「～ながら」のような付帯状況を表す節は、古代から現代まで一貫して見られる形式であるが、節内の構造について相違点が認められる。現代語では「袖を濡らして」のような他動詞節（目的語＋他動詞）が自然であり、自動詞節（対象主語＋非対格自動詞）は不自然であるのに対し、古代語では他動詞節と自動詞節とが共に用いられているのである。このような節内の構造について、古代語・現代語を対象とした共時的研究は見られるものの、その変化を捉えようとした研究は試みられていない。また、このような節内の構造変化は従属節における格付与の体系や当該時期における従属節の全体像とも関わっていると考えられ、これらの観点からの分析が求められる。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本語における付帯状況節の構造変化を通時的な調査に基づいて実証的に明らかにすることである。

３．研究の方法

まず、各時期の資料から個別の形式の用例を収集し、節内の構造について検討する。具体的には「～て」、「～つつ」、「～ず」について、上代から中世までの和文資料（散文・韻文）を主な対象として用例を収集し、その変化の時期や過程を明らかにする。

次に付帯状況節を体系的に捉えて現代語と対照し、中古語における従属節分類のうち、従属度の高いものを中心にその様相を明らかにする。

続いて「～ながら」、「～と」について上代・中古の用例を中心に分析する。付帯状況を表す「～ながら」については上代・中古における「～て」、「～つつ」、「～ず」との構造の違いに着目し、その特徴を明らかにする。「～と」については付帯状況を表す形式と看做し得るかという点を検討するために用例と辞書記述とを照らし合わせて整理する。

これらに加えて「付帯状況」という術語が日本語研究においてどのように用いられてきたのかという点について、特に 2000 年代以降の動向を中心に調査し、英訳をめぐる問題についても取り上げる。

以上の研究と並行して、用例調査を円滑に行うために品詞や活用形の情報を付与した中古和文資料のコーパス構築を試みる。

４．研究成果

(1) まず、「～て」、「～つつ」、「～ず」（それぞれ、テ節、ツツ節、ズ節とする）について用例調査を実施し、分析した。その結果、節内に対象主語を含む非対格自動詞テ節の用例は中世前期まで見られ、同じくツツ節、ズ節の用例は中古まで見られることを明らかにした。また、この変化について従属節分類における位置づけを検討した。その上で、このような統語的制約の変化が日本語における活格性の喪失という変化を反映したものである可能性があることを指摘した。（「〈付帯状況〉を表す節における統語的制約の変化―動詞テ節・ツツ節・ズ節を対象として―」『日本語の研究』19（2）、2023 年 8 月）

(2) 次に (1) の成果を踏まえて、現代語の従属節分類と中古語の従属節分類とを改めて対照し、主節に対する従属度の高い付帯状況節を中心に中古語の従属節分類の再検討を試みた。特に中古語の従属節分類に関する研究において従来、指摘されて来なかった対象主語の生起という側面から新たな分類の観点を提案した。更にこのような検討を通して、現代語を対象として提案された分類や指標を古典語に適用したり、通時的研究に援用したりすることの意義や注意点を示した。(「日本語における付帯状況節の変遷と従属節分類の歴史的検討」大東文化大学語学教育研究所 2023 年度講演会、2023 年 12 月)。

(3) 続いて「～ながら」、「～と」について上代・中古を中心に用例調査を実施し、分析した。付帯状況を表す「～ながら」については節内に対象主語を含む非対格自動詞節の確例が見出し難いことから、(1) に示した「～て」、「～つつ」、「～ず」とは異なる特徴を持っている可能性がある。また、「～と」については用例と辞書記述とを照らし合わせて検討した結果、特に学習用古語辞典において充分な説明が施されていない点に課題が認められた。これを踏まえ、付帯状況を表す「～と」について学習用古語辞典における記述を整理し、特に利用者にとって理解の難しい箇所を挙げることを通して、当該の節に関する研究と教育との接続に関する課題を具体的に提示した。(「学習用古語辞典における助詞「と」の語釈―「君待つと」の歌をめぐって―」第五回北京師範大学・筑波大学学術交流会 十周年記念シンポジウム「新しい形による中日言語文化の交流と共有」、2024 年 3 月)。

(4) これらに加えて「付帯状況」という術語が日本語研究においてどのように用いられてきたのかという点について、既に明らかになっている導入の段階（1980～1990 年代）に続く時期として、特に 2000 年以降の記述を調査し、整理した。また、定着を見ない「付帯状況」の英訳について、言語学の他の術語との関係を踏まえつつ、複数の英訳の候補を比較してそれらの妥当性を検討した。

(5) 最後に（1）～（4）の研究と並行して、中古和文資料『夜の寝覚』を対象に品詞や活用形を指定した検索が可能となるコーパスの構築を進めた。本文を電子化したり、形態論情報を付与したりする方法やその際に生ずる課題を示すと共に、実際にそのコーパスを用いて用例調査を行う事例についても報告した。これは特に大規模な研究機関の手を借りずにコーパスを構築するための方法論の開拓を試みたものとして位置づけられる。(「中古和文資料『夜の寝覚』のコーパス構築の試み」言語資源ワークショップ 2023、2023 年 8 月)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 菊池そのみ	４．巻 19（2）
２．論文標題 〈付帯状況〉を表す節における統語的制約の変化―動詞テ節・ツツ節・ズ節を対象として―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本語の研究	６．最初と最後の頁 147-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 菊池そのみ・菅野倫匡
２．発表標題 中古和文資料『夜の寝覚』のコーパス構築の試み
３．学会等名 言語資源ワークショップ2023
４．発表年 2023年

１．発表者名 菊池そのみ
２．発表標題 日本語における付帯状況節の変遷と従属節分類の歴史的検討
３．学会等名 大東文化大学語学教育研究所 2023 年度講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 菊池そのみ
２．発表標題 学習用古語辞典における助詞「と」の語釈―「君待つと」の歌をめぐって―
３．学会等名 第五回北京師範大学・筑波大学学術交流会 十周年記念シンポジウム「新しい形による中日言語文化の交流と共有」（招待講演）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関